

PREVENTION No.370

2024年10月17日開催

アルコール関連問題予防研究会「5つの事件に学ぶ」配布資料第2版

山村 陽一(元JRバス関東会長 飲酒問題よろず相談所)

はじめに

50年間、飲酒運転防止に取り組んだ。30年間、安全管理の立場から事故再発防止対策を実施した。ここ20年間は、啓発・教育指導を提案してきた。事件発生の際に、対策や考え方の不足を学び、修正した。今回、5つの事件に学んだこと及び今後の薦める施策について述べたい。

1. 悲惨な事件の意義

世の人々を驚かせ、悲しませる事件は、天が人類へ与える「警告」と考える。社会・関係者、そして私への警告だ。例えば、今年2024年4月JALダラス事件は、2003年以来の、私の飲酒問題活動への「天の警告」である。

どんな警告か。「私の活動が、処分事由の報道発表のみに頼り、事案当事者の飲酒状況の情報把握が不足だ」と。再度の警告。報道された事件を5つ選び、反省点を述べる。

○2024年ダラス事件に学ぶ

良い飲酒問題対策提案も、必要な人の行動改善を起さない、と、天が、再度、警告した事件。検知器反応、規則違反もなく、すりかえ・ごまかしの不法行為もない。酒乱・依存症などの報道もない。ロンドン空港飲酒事件以後に発生した航空関係飲酒事件の対策が効を奏したかに見える。しかし、パイロット、客室乗務員が集団で飲酒、騒ぎ、警察出動、欠航との不祥事だ。私の5年間の活動を帳消しにする事件でもある。私はロンドン事件直後、報道に基づき、4ドリンク12時間の内規を批判し「0、1、2ドリンクの推進」を提案した。2021年千葉県八街事件後は「事案に学ぶ」を提案した。ダラス事件当事者に、「0、1、2ドリンク」の知識が無かったと考え「られず、また全員が、過去の飲酒事件を無視したわけでは無かろう。

だが、実際の酒類購入、飲酒場面では実行されていない。(6人ワイン7本、ビール3ダース)多分「処分者のような事はしない」の決意だけで、「012ドリンク」は行われず、「事案に学ぶ」も生されず、事件の発生だろう。再発防止対策提案を、多量飲酒者が他人事にしたために、事件の反省だけでなく、当事者の飲酒行動の反省、再発防止活動が大事だと考える。

○2003年JRバス関東東名高速バス飲酒運転事件に学ぶ

プロ意識高揚、順法精神教育、処分強化、見せしめ、機器導入では飲酒運転を防げない。依存症予防教育、具体的には多量飲酒習慣改善、節度ある適度な飲酒、の啓発を提案

○2006年福岡県海の中道幼児3名水死事件に学ぶ

講演・シンポジウム開催、マスメディア利用、パンフレット配布などの啓発活動の限界を知る。アルコール知識教育と節酒実践指導のできる人材、飲酒運転防止インストラクター養成提案

○2018年ロンドン空港飲酒事件に学ぶ

航空界に飲酒問題があるのを、インストラクターの情報で知りつつ手を打たず放置。定期航空協会の講話で「4ドリンク12時間」の内規を批判し「012ドリンクの推進」を提案。

○2021年千葉県八街学童5名殺傷事件に学ぶ

事件当事者、職場の上司、アルコール依存症の知識なし、健康日本21飲酒指標も知らず。必要な情報が届かないのは、過去の飲酒事件を、他人事にするため。「事案に学べ」提案

2. 今後の対策

予防対策 「012ドリンクの訓練と実行」 再発防止 「職場復帰回復プログラム」

○予防は0, 1, 2ドリンク訓練と実行（個人も会合も） アルコールは精神作用物質（薬物）

0ドリンクが正常な状態（薬物0） 1ドリンク（薬害受けやすい人） 2ドリンク（成人男性処方）

食欲増進、気分高揚の効用には、2～3時間の薬物による脳のマヒで十分（ガイドライン）

*多量飲酒者へは「気づき面接」 飲酒運転防止インストラクターへアップデート研修

○職場復帰回復プログラムの必要性（不備により、不祥事、飲酒問題が他人事に）

失敗した仲間の救済だけでなく、飲酒問題予防及び多量飲酒者の「気づき」に寄与

事件当事者は、すべて退職。その後トレース無し。依存症者放置、多量飲酒者無指導

ロンドン事件当事者：再飲酒、飲酒運転執行猶予、警察出動騒ぎ（数回）、現在、通院
機器反応者：退職後、航空界に再就職した者は、心を閉じ、語らず（心機一転のみ）

雇用継続者：通院、断酒、自助G参加、職場復帰後退職（周囲が回復疑問視か？）

○回復プログラム骨子

処分後、精神的ケア、治療、飲酒振り返り、復帰訓練、信用回復活動、総合判定委員会公表、元職場復帰。周囲は、自己反省に基づく再発防止活動により信用を回復する。

事件当事者は、事件発生、処分調べ、処分、の精神的ショックから精神不安定になる。事件を恥て心機一転、心を閉じる（事件全体の忘却を望み、飲酒問題を直視できず）処分後精神的ケアは、飲酒問題直視への道を開くために必要なカウンセリング過程

○悲惨な事件の意義と職場復帰回復プログラム

悲惨な事件は人類及び関係者へ「天の警告」、被害者も、加害者も、ともに犠牲者。人類を救う犠牲なら、いわば、共に社会の恩人。社会復帰できる社会的制度が必要。社会的信用回復活動を含んだ職場復帰回復プログラムの整備が喫緊の課題（天の意図）天意に適えば、事故は減少。依存症当事者放置が依存症事件再発（伊勢崎トラック事件）危険運転致死傷罪適用は、八街事件防止できず。（当事者も上司も依存症に気づかず）世間を騒がした交通事件当事者（依存症、一時多量飲酒者）に、職場復帰者はいない

○職場における飲酒問題の疑いのある者との係わり方

御用聞き精神：押しつけず、気軽に、くりかえし、空振りを覚悟して、働きかける。但し、一方的な教示を避け、本人の「気づき」を促し、自主性を尊重する。

3、依存症事件当事者を支えた人の述懐

（2信）

「依存症」になる人は抱え込みやすいのでしょうか。助けられ下手という表現しかできませんが。今、現在、私は再飲酒（スリップ）についての本を読んでいます。・・・「人との繋がり」本当に大事ですね。何度逃げても見捨てない、周りの理解によって依存症が依存症である事を安心して相談できる環境を作って行けたら、と思ったりします。私の感想は、もし良かったら使ってください。

（1信）

私なりにアルコール依存症について調べたり実際に関わってきて、感じているのは周りに気付いてもらいにくい事と実際に事件になっても理解されにくいという事が問題なのではないか、と感じます。

病気という認識をされにくいというのでしょうか？（ただの酔っ払い、ただの問題児）で片付けられてしまう。私自身も実際に、そう思っていました。問題を起こして解雇された後、孤独になって、また問題を繰り返してしまふ。

本人の意思ではコントロール出来ないから「依存症」という病気なのに「意思が弱い」「だらしない」で済まされてしまう。なのに依存症である本人ですら自分の意思の力で何とか出来ると思ってしまうのが本当に厄介です。そしてアルコールを飲んでしまふ後ろめたさから、どんどん社会から孤立してしまつて。

だから「他人に頼る」事がとても重要なのに、後ろめたいから出来ない。

「自分では何とも出来ない」「依存症は病気なんだ」と自覚する事が大事なのに。アルコール依存症になった経緯は、さまざまだと思いますが、周りをもっと早く気付けて、本人も「他人を頼る」事が出来れば良いのですが。特にアルコールは大病にも繋がります。

飲む、飲まない、という問題だけでなく根本的な所から観ていかないと何の解決にならないと思います。「死人に口なし」自助グループでは聴く事が出来ない、孤独に逝っていった人たちの声を聴いてみたいですね。

(3信)

[聴く事しか出来ないので相手が話たくなったら、話をしたいと思ったタイミングで話だけは聴いていきたいと思います。]

(4信)

・・・援助者はどうでしょうか？ 常にギリギリの精神状態で仕事をして、依存症患者へ対しても、どうしたらよいのかと、常に頭から離れなくストレスを溜めながら踏ん張っていると思います。・・・援助者は援助が当たり前になっているんですね。・・・
依存症だけでなく、あらゆる疾患を持ち生きている本人を含めて支えている人たちが「大丈夫だよ」と互いに言いあえる世の中になりますよう、祈っています。

(話しを聴いた山村の感想)

「孤独になる」

⇒ 医師や医療スタッフは、医療的サポートが役割。本人が専門病院へ行かない限り、サポートは受けられない 「酒気帯なしで来院ください」(孤立化促進)

身近に「聴いてくれる人」がいれば、孤立化が緩和される。(人間的サポート)

飲酒問題のポイントは、職場・地域・業界に、「人間的サポート」の充実だと考える。

「聴くことしかできない」

⇒ 御用聞き精神 世話に行き、話したくなったタイミングで聴く。二人だけで、距離が近づきすぎると、暴言・暴行の危険。できるだけ第三者の活用を。

依存症、介入方法の知識がある、相談まとめ役が必要。(援助者の孤立防止)

「自分の意志で何とかできると思う」

⇒ 事件後、依存症と知っても、解雇されれば、治療を受けず。解雇のショックで断酒。体調回復。飲酒欲求も無し。依存症の自覚を持たず。周囲も、事件、飲酒問題に触れず。依存症を学ばず。治療もすすめない。

「再飲酒」

⇒ 依存症者に長期間の酒気帯勤務(活動)成功体験があるから起きる。

事件前は、うまく仕事をこなしていた。たまたま運悪く事故を起しただけ、との信念。

再飲酒したまま、うまくやる、断酒しなくても、しっかり行動できる、との自信。自覚。

再飲酒を注意されると強く反発。再飲酒をよくあること、とまず受入れる、と信頼。

「援助者の孤立」

⇒ 公共の相談、自助グループや病院家族会へ行く暇がない。

家族でなければ拒否される場合もある（同期生、元同僚、元上司など＝解雇不利）
孤立した事件当事者は、援助者が他人へ相談するのを嫌がる。（二人で孤立）
家族・友人などをつなぐ御用聞き精神の「人間的サポート」 相談まとめ役が必要。

「祈り」

⇒ 飲酒問題の原因は、アルコール依存症、一時多量飲酒である。

これは、アルコールの薬害による公害病。人々が病気による事件・事故と理解して、加害者も被害者もアルコール薬害の犠牲者として、同情的に対応する世にしたい。

社会全体が、アルコール薬害を受けた「弱者」と、当事者、家族、援助者を理解する。

この考え方は、大事件の加害者（犯罪者＝病者）への理解、と事件被害者感情との整合性が問題となる。（いたいけな子供が、理不尽に殺される悲劇を起した極悪人）

事件は、人類への「天の警告」、「天の計らい」、恨まず、学べ、各々が。

「天恵」

⇒ 天意にかなえば、願成就。博多駅前停電事故が会った年、会場がその年に限りとれず、停電をまぬかれた。台風にも前日行動で支障なく研修実施。健康にめぐまれ、腰痛も研修終了後発生など、病気による活動キャンセルなし。

終わりに

20年間の活動を俯瞰する機会をいただきありがとうございました。

今後についても整理できました。身体が続く限り、この問題に取り組みます。

最近、気づいたことに、健康診断でメタボ検診ほど詳しく、多量飲酒がチェックされていないとです。事件当事者は、航空身体検査や運転者定期健康診断を合格しています。AUDIT 20以上でも3割の人にしか肝機能検査異常が見られないと聴きました。飲酒問題の自覚が持ちにくい原因の一つでしょう。航空身体検査、運転者の定期健康診断のあり方も検討すべきです。飲酒する者への自己申告、問診の仕方に改善の余地はないのか？また、健康相談コーナーのような、合否に関係なく気楽に立ち寄れる相談所を設けるなどの工夫ができないか？会社関係者と共に考えたい。